地球社会統合科学セミナー

ロシア革命100周年シンポジウム

未完の革命

―ユートピア／ディストピアへの欲望―

基調講演（13 時～ 14 時 30 分）

上野　俊哉（和光大学 教授）

主な著作：『四つのエコロジー：フェリックス・ガタリの思考』（河出書房新社）
『思想の不良たち：1950年代 もう一つの精神史』（岩波書店）
『荒野のおおかみ：押井守論』（青弓社）　など多数

パネル報告とディスカッション（14 時 50 分～ 18 時）

歴史の中のユートピア／ディストピア

1. 人体改造の実験、あるいは遺伝子の共産主義
   佐藤 正則（九州大学大学院言語文化研究院）
2. ノスタルジーとユートピア―昭和 30 年代ブームをめぐって
   波潟 剛（九州大学大学院地球社会統合科学府）
3. 「頭の中」を取り締まるという夢
   ―ロシア革命が解き放ったもう一つの近代
   鬼丸 武士（九州大学大学院地球社会統合科学府）
4. 転向コミュニストの夢―最後のユートピアとしての人権
   松井 康浩（九州大学大学院地球社会統合科学府）

パネル・ディスカッション

討論者：上野 俊哉、熊野 直樹（九州大学大学院法学研究院）

閉　会（18:00）

2017年
9月30日(土)
13時 – 18時
（12時30分開場）

事前申込不要・入場無料

会　場

JR博多シティ
10F大会議室C/D

問 合 せ

松井 康浩（地球社会統合科学府）
E-mail：matsui@scs.kyushu-u.ac.jp

ISGS

【主催】九州大学大学院　地球社会統合科学府

未完の革命：ユートピア／ディストピアへの欲望（概要）

本企画のねらい

1917年のロシア革命、とりわけ十月革命からまもなく100年を迎える。共産主義のユートピアが掲げられたその足元で、スターリンの「大テロル」というディストピアが広がりを見せたように、この革命は、夢と悪夢、希望と絶望を合わせ鏡のように示した。もちろん、革命から誕生したソ連の消滅すら四半世紀以上も前のことで、ロシア革命とソ連の存在はすでに歴史の一コマとなった。ただそれでも、ロシア革命が解き放った革新的なアイデアやそれに基づくプロジェクトは装いをかえて受け継がれ、わたくしたちが生きる現在にも今なお無視しえない形で作用し続けているのではないだろうか。

なお、ここでいうアイデアやプロジェクトとは、個々人や集団をターゲットに設定し、人間の意識や生活スタイルを刷新し、さらには人間の身体や文化・社会そのものをも作り変えようとする渇望であり、あるいは意図せずとも変容させてしまうような営みである。グローバル化の進展、科学やテクノロジーの自己組織的な展開は、ロシア革命が展望した「新しい人間」による「新しい社会」というユートピア／ディストピアを現実のものとする可能性を高めているのではないか。

このシンポジウムでは、ロシア革命から生まれた各種のアイデアや実践に手掛かりを得ながら、20世紀初頭から今日まで脈々と受け継がれてきたユートピア／ディストピアへの欲望を多角的かつ統合学際的に論じたい。

上野俊哉先生の基調講演

メタルスーツを着たアニメ（攻殻機動隊など）から、ガタリや鶴見俊輔など内外の思想家にまで広がる恐ろしく多様な対象・現象に分析を及ぼし、現代社会や文化を縦横無尽に語る上野俊哉先生。今回は表題のテーマに関わって自由に論じていただきますが、はたしてどのような話が展開されるでしょうか？　「ロシアの宇宙精神と昨今話題の人新世や思弁的実在論、オブジェクト指向存在論の議論の接点でも提示できれば、議論の口火にはなるでしょうか」という言葉を頂いています。

パネル報告の概要

佐藤正則「人体改造の実験、遺伝子の共産主義」

1920-30年代のソ連では、「新しい人間」の創出を目的として、人間の身体を科学・技術的手段によって直接的につくりかえようとするさまざまな試みが見られた。そのうち、ボグダーノフの血液交換の実験、テイラー・システムによる労働者の身体改造、ルイセンコ主義と生物学への国家の介入などをとりあげて、それらが立脚する人間観を明らかにする。現代社会における人間の身体と生命をとりまく諸問題との関連も考えてみたい（主著『ボリシェヴィズムと“新しい人間”—20世紀ロシアの宇宙進化論』）。

波潟剛「ノスタルジーとユートピア—昭和30年代ブームをめぐって」

1990年代以降、日本では、昭和30年代をめぐるノスタルジーがブームとなった。当時、昭和の、そう遠くない過去が、記憶や歴史を追体験できる場として、また、一種のユートピアとして描かれていたことは、しばしば指摘されてきた。だがユートピアは、新しい時代の、未来の理想として描かれる。ならば、過去の姿を借りて未来を語るのは特殊なことだといえるのか。この疑問から出発して、ユートピアとノスタルジーの親和性を再検討してみたい（主著『越境のアヴァンギャルド』）。

鬼丸武士「『頭の中』を取り締まるという夢—ロシア革命が解き放ったもう一つの近代」

共産主義が思想である以上、だれが共産主義者であるのかは外見からはわからず、政治情報警察は「頭の中」にある思想を覗き、取り締まらなければならない。それは、どのように実行されていたのか。本報告は、1920年代、30年代のイギリス植民地に設置された政治情報警察の活動を事例に、共産主義者の監視、取り締まりとその実効性、その限界を明らかにする。報告の最後には、この約100年前の事例と、現代のテロリストに対する監視と取り締まりとの類似点と相違点、さらには「監視社会」との関連にも触れてみたい（主著『上海「ヌーラン事件」の闇—戦間期アジアにおける地下活動のネットワークとイギリス政治情報警察』）。

松井康浩「転向コミュニストの夢—最後のユートピアとしての人権」

S・モインは、著書*The Last Utopia: Human Rights in History* (2010)で、1960年代までに現れた現存秩序に対するオルタナティヴの中で、70年代以降に生き残ったのは「人権」だけだったと主張する。本報告は、ソ連の人権擁護活動家で、プラハの春弾圧に抗議して赤の広場でデモを敢行したP・リトヴィノフを支援した英国の詩人、S・スペンダーの共産党歴に特に着目しつつ、転向コミュニストとグローバル人権規範・実践のかかわりを分析する（主著『スターリニズムの経験—市民の手紙・日記・回想録から』）。